

深海の底か、また宇宙の果てか、深く暗い闇の中を、誰とは言えねど横切る者達あり。何とは言えねど動くものあり、聞こえる音あり。目をこらし、息をこらしてよく見れば、潜水服なのか宇宙服なのか重装備の者達が、何やら運び動かしている様子。やがて闇の中、ひとつの扉が開けられ、まぶしいばかりの光がさしこめる。そして、動きまわる者達は一入、また一人と光さす扉の中に消えてゆく。光がまたたく間に闇をおおいつくした時、そこに朝の教室が出現する。陽のあたる坂道より、生徒が登校しはじめる。

生徒が一人、また一人と教室に入ってくる。一人で黙々と夏休みの宿題を写している者、ペチャクチャ夏休み中の出来事をおしゃべりしあう者、窓の外を眺めている者、様々あり。

〔即興〕登校から始業のベルまで、朝の教室風景。

木下 おはようございます。あつ、フミちゃん！元気だった？私も元気だった。
保科 そうみたいね。

木下 アツ、私、フミちゃんにおみやげある。
保科 どっか行ったの？

木下 ウン、千葉に行ったの。これ、房総のティッシュペーパー。私が泊まったひまわり旅館のひまわりティッシュ。

保科 ありがとう。大事に使うね。
木下 ウウン、使わないで、とっついて。

齋藤 桂木イー、桂木、ひさしぶりだな。あとでな、例のな、宿題たのむな。
保科 あら、齋藤さん、おはよう。

木下 おはよう。
齋藤 おはよう。

保科 アツ、齋藤さん、パーマかけたの？
木下 本当だ。

齋藤 バカヤロー、天然だよ。
保科 えー、夏休み中に天然になったの？

齋藤 へへへ、自分でかけたんだ。似あうだろ。
木下 ウン、似あう。

保科 変わったパーマね。
桂木 おはようございます。

木下 おはようございます。
保科 桂木さん、おはよう。

桂木 私、行ってないよ。桂木さんも海に行ったの？

木下 私、行ったの。ホラ、焼けてるでしょ。
桂木 私、行ってないの。
齋藤 桂木、よろしくお願いします。
桂木 何がですか？
齋藤 夏休みの宿題です。よろしくお願いします。まず、算数からです。一頁の間
1 よろしく。
桂木 32です。
齋藤 問2、どうぞ。
桂木 そういうのいやです。
齋藤 桂木、今、何て言った？
桂木 いやです、写させるの。
齋藤 はじめてそういうこと言ったな。覚悟はできてんだろうな。本気だな。
桂木 ウソです。
齋藤 ヨーシ、わかりやいいんだ。次、問2だ。
桂木 41。

登校のベル。

一人の生徒があわただしくかけて、教室に飛びこんでくる。

大谷 おはようございます！
木下 大谷さん、遅刻だよ。

大谷 セーフ、セーフ。後ろで門がピシャッと閉まったの。危なかったあ。
木下 大谷さん、大谷さんに聞きたいことがあったの。
大谷 なに？
木下 七月二十五日から八月二十一日まで、大谷さん、家にいなかったよね？
大谷 そうそう、いなかった。
木下 どこ行ってた？
大谷 うれしいわ、その質問。シスコに行っていました。
木下 シスコ。
大谷 そう、シスコ。
保科 シスコ？ 静江ちゃん、シスコだって！
木下 わかっているわよ。ディスコでしょ。
大谷 違うわよ。シ・ス・コ、サンフランシスコ。どこにあるか知ってるの？
木下 知ってるわよ。アメリカでしょ。
大谷 わかっているじゃない。
保科 大谷さん、どうしてアメリカに行ったの？
大谷 うれしいわ、その質問。実はね、パパが単身赴任でね、ママと二人で引越
しの手伝いがてら、シスコでバカンスなの。それでね、聞いて聞いて。パパ
んちのお隣にトニーっていうハイスクールの男の子がいて、バスケット部の
キャプテンなの。
保科 大谷さん、おしゃべりしたの？
大谷 まあね、ハウ・ドウ・ユ・ドウって感じだね。ペンフレンドになりましたよ

うとか。
木下 それから？ キスはキス？
大谷 それは来年に持ち越したんだけど。とりあえずペンフレンドだから、時間の問題だと思うけどー。

始業のベル。
H・R・T夏目新子、登場。トレードマークの屈託のない笑顔が飛びこんでくる。

夏目 おはよう！
全員 おはようございます。
保科 起立、礼。着席。
夏目 みんな、元気だった？
生徒達 はい！
夏目 では、出席をとります。大谷恵美子、桂木秀子、木下静江、斎藤妙子、保科二三子。どうだった、夏休みは。
生徒達 (それぞれの反応)
夏目 大谷、やけにうれしそうだね。何かいいことあったの？
大谷 ウフフ。
木下 先生、大谷さんは夏休み、アメリカに行ったんだって。
夏目 ほう、アメリカのどこ？

大谷 サンフランシスコです。
夏目 サンフランシスコ！ 誰と行ったの？
大谷 ママと二人で。パパが仕事の関係でシスコに八月から駐在することになって、引越しの手伝いをかねて行ってきました。

突然、ガターンという音。斎藤妙子が席ごと倒れる。

夏目 斎藤、まだそのクセなおってないようだね。歩くときもそうやって、のけぞって歩くの？
斎藤 別に。
大谷 斎藤君は、歩く時は前につんのめってます。
斎藤 大谷、うるさいんだよ、お前は。静かにしろ、バカヤロー。
大谷 そういう斎藤君こそ、ガタゴトうるさいと思います。
斎藤 ビービー、ビービー、うるせえんだよ。
大谷 そういうのをね、Bのサイレントっていうのよ。Bクワイエットともいうの。とにかく上にBがつくわけ。ビー、ビィコウスじゃない、ピロング、…ビービー……
桂木 先生、大谷さんはうるさいと思います。
夏目 そういう桂木はやけに静かだね。どうだった夏休みは。
桂木 計画通りいきました。
夏目 どういう計画たてたの？

桂木

七月中、フアール昆虫記、キューリー夫人、エジソン、野口英世、大菩薩峠を讀破して、空気中の酸素に関する実験、酸性酸化化合物五酸化リンに関する実験と方程式を作る。八月第一週までにほぼ全宿題を終了。第二週、地震探知器の製作。第三週、縁側にて、じつとほぼ地震を待つて、第四週目は花火実験をしました。

夏目

花火実験なんて危ないね。

木下

先生、大丈夫です。桂木さんのお父さんは、花火屋さんなんです。今年の花火大会で最後に打ち上げた「鯉の滝のぼり」っていう仕掛け花火は、桂木さんのお父さんが打ち上げたんです。

夏目

そうだったの。あれ、桂木のお父さんが作ったのか。きれいだったね。それほどでもないです。

桂木

あつ、照れてる、照れてる。自分が作ったわけでもないのに。

大谷

大谷さんはうるさいと思います。

桂木

でもね、桂木さんの花火実験は失敗したんです。それで髪の毛焦がしちゃって、お父さんに怒られたんだよね。

桂木

木下さんはうるさいと思います。木下さんは、木下さんはどうしてそんなこと知ってるんですか？

木下

だって、私は見てました。

保科

静江ちゃん、あなた、また探偵ごっこやったんでしょ。

大谷

エーッ、探偵ごっこ？何、それ。

保科

昔、はやったのよ。誰かを犯人に見たてて後つけたり、アリバイを立証した

木下

りするの。静江ちゃん、まだそんなことしてたの？
ちがうよ。夏休みの宿題に「仲良し観察日記」っていうの書こうと思ったんだよ。

夏目

仲良し観察日記？おもしろそうだね。どうやって観察するの？

木下

一人一人の一日を見つからないように観察して、不明な時間は推理して、その日のアリバイを立証していくんです。たとえば、桂木さんはお父さんに叱られた後、どうしてたと思う？

大谷

押し入れに隠れてビービー泣いてるの。

木下

ちがうの。井戸のぞいてたの。井戸のぞいて、父ちゃんのバカヤロー、父ちゃんのバカヤローって叫ぶと、井戸の中からバカヤローって……。

桂木

木下さんは、木下さんは、デバガメだと思えます。

齋藤

アーツ、そういえばこの夏休み、木下にやけに会ったけど、あんた、私のことも観察してた？

木下

してた。

齋藤

趣味悪いんじゃないスカ。仲良しでもなんでもないんじゃないスカ。

木下

だって、同じクラスの仲良しじゃないよな。

齋藤

まさか、それ提出するんじゃないよな。

木下

するよ。だって宿題の日記に書いたんだもん。

齋藤

出したら承知しないかね。バカヤロー。

木下

大丈夫よ、齋藤さん。先生、齋藤さんは親孝行なんです。お母さんのお店の
お手伝いをして、夜中の二時まで焼き鳥焼いてました。

齋藤 バカ、バカ、バカ、ワー、言うな、ワーワーワー。
大谷 キャー！ スキャンダルだわ。夜中の二時なんて、オットナー！

齋藤、木下の口をふさごうとして二人もみあう。それをおもしろがって
あおるもの、仲裁に入るものなど、教室、騒然とする。

夏目 静かに！ 走るんじゃない。コラ、コラーツ！

桂木 先生！ 先生は、うるさいと思います。

夏目 ……。じゃ、問題の宿題を提出してもらおうか。まず、自由課題から。

大谷 シスコのひまわりの観察です。

齋藤 新宿のひまわりの観察です。

木下 水族館です。

桂木 地震探知器です。

各自、宿題を提出する。一人、保科だけが席に座ったままである。

夏目 これで全部かな？

大谷 先生、保科さんがまだです。

夏目 保科、宿題は？

保科 なくしました。

夏目 宿題をなくした？

保科 はい。

夏目 どこに？

保科 森の中に。

夏目 森？ 森ってまさか七ツ森じゃないだろうね。

保科 そうです。

夏目 あの森へ行ったの？ 保科、あの森に入っただけじゃいけないって、夏休み前にあれ

ほど注意したはずだよ。聞いてなかったの？

保科 聞いてました。

夏目 じゃ、どうして行ったの？

保科 ……虫を。

夏目 虫？

保科 珍しい虫がいるような気がして。

夏目 虫なら学校の近くとか、家のそばでだって採れるじゃないか。去年もその辺

でいろんな虫を採集してきたでしょ。

保科 いやだったんです。去年と同じのは。もっと違う珍しい虫を採って見たかっ

たんです。

夏目 保科、藤波朋子という生徒のことを知ってるだろう？

保科 ……はい。

夏目 藤波は四年前、あの七ツ森に行って、今でも行方不明になったままなんだ。

木下 先生、保科さんは昆虫採集の全国夏休み展に出品するつもりだったんです。

夏目 そんなことは関係ない。優勝するためなら、どんなことをしてもいいという

保科
.....
ことにはならないでしょ。どうなの保科？

夏目
私は保科が規則を破ったことだけを怒ってるんじゃないんだよ。あの森が危険なことを知っていながら、なおかつ入ったというのがショックなんです。四年前の夏休み、藤波朋子はきつと珍しい虫を探したかったんだろう、やっぱり七ツ森に入ってしまったんだ。決して入ってはいけないという規則を破ってね。.....二学期が始まって、いつもの席に藤波はやって来なかった。みんな、今日、この席に保科が座ってなかったらどうする？いつまでも帰る主のいない空席を眺めなければならぬ気持ちはどんなものか？きみ達にはわからないのか？保科、きみはどうなんだ。そういうことを考えもしなかったのか。先生は残念です。非常に残念です。虫一匹のために、きみは大切な命をなくすところだったんだよ。

保科
虫も生きてます。

夏目
保科！先生の言ってることの意味がまだわかってないようだね。いや、全然

保科
わかってないんだね。

夏目
わかります。

保科
いいや、わかってない。.....放課後、職員室に来なさい。

夏目
じゃあ、夏休みの日記を集めます。

大谷
シスコの一ヶ月です。

齋藤
新宿の一日です。

木下
仲よし観察日記です。

桂木
日記を油絵で描いてみました。

保科を残して全員、日記帳を提出する。

夏目
保科、日記帳は？

保科
.....なくしました。

夏目
.....日記帳も？

保科
はい。

夏目
どこに？

保科
森の中に。

夏目
.....きみは自分が何を言ってるか、わかっているのか。

保科
.....

夏目
他になくしたものはないの？

保科
.....

夏目
どうやら保科がなくしたものは、宿題だけではないらしい。保科は森の中にいろんなものをなくしてきたようだね。

保科
.....

夏目
放課後、職員室に来なさい。.....次、役員改選！委員長、副委員長、前に出て。

保科
では、二学期の役員改選を行います。投票用紙に委員長と副委員長の名前を

書いて、出して下さい。

投票は黙々とすみやかに進められる。

保科 では、開票します。

結果、委員長に齋藤妙子、副委員長に桂木秀子が選出される。

夏目 では、新役員、前に出て下さい。

齋藤 異議あり！先生、私にはクラスのあたまなんてできません。今まで通りでいいと思います。

夏目 決まったことに文句を言わないこと。齋藤、前に出なさい。

保科 齋藤さん、よろしく願います。

桂木 みなさん、私が副委員長に再選されました、桂木秀子です。クラスの手足になりたいと思います。よろしく願います。

齋藤 私、齋藤妙子といたしましては、この度のこの選出にあたっては、まったく予期せぬ出来事でありまして、つまりクラスのはじきもんでありますところの私、つまり一般ピープルのみなさま方とは違い、勉学の分野でもとりわけ目立つ活躍をしているわけでもない私、齋藤妙子が、このようなまっとうな仕事など、とうていできるわけもなく、ましてや、こういうことは舎弟の人の望の厚いお人がやるべき仕事であって、私、齋藤妙子といたしましては、は

なはだ申し訳ないことながら、この度のおはなし、是非お断りさせていただきたく思っておる次第でありまして……

終了のベル、けたたましく鳴る。

夏目 では、みんな、二学期に向けて気をひきしめて、新たな気持ちで頑張ってください。

全員 はい。

齋藤 起立、礼！

—休み時間—

齋藤、途方に暮れたように、机の前でうなだれている。

大谷 サイトー君、気にしちやだめよ。いいじゃない委員長やればあ…落ち込んでるのオー？ サイトー君、ねえサイトー君、ねえねえ、サイトー君たらあ。

齋藤 ルセエなあ、齋藤さんだろ、アンなんだよオ（顔を上げると、予想もしなかった笑い顔である）

大谷 アレエ、喜んでるんだ。

齋藤 ギケンじゃないヨオ、委員長なんてウザッテエんだよ。

木下 あ、テレテルテレテル、サイトー委員長がテレテルウー。

齋藤 木下ッ、テメー今、なんて言ったんだよオ。
木下 サイトー委員長がテレテルウ……………
齋藤 アンだつてエ！
木下 サイトー委員長オが……
齋藤 そーか、そーか、ヨシ、ワカッタア！ なんかわかったよーな気がする。ヨシヨシ。

桂木、みんなの宿題を抱えて教室を出ようとする。

齋藤 おつ、桂木、それ職員室に持っていくのか。ヨシシ、えらいぞ。(教室のドアを開けてやる)

桂木 ありがとうございます。

齋藤 ガンバレヨ、バカヤロー。

桂木 ありがとうございます。

齋藤、廊下を走る生徒を目にしたらしい。

齋藤 コラ、その二人、お前らだよ。バーロー、走るな、走るな、ろーかを走るな。な、その張り紙がお前らには見えないのか？ 廊下は静かに右側を

だろー、バーロー。そうだ、そうだ。あいさつしろ、あいさつ。

桂木 (教室に入ってくる) 委員長！ 次は算数です。齋藤くん、よろしくおねが

いします。

齋藤 ヨーシ、わかったー。だがなあ、この際、みんなに一言いっておくがアこんりんざい、わたくし齋藤のことを、サイトー君などと呼ばぬように。ましてや、サイトー！ などと呼び捨てにするものがあらば、即刻打ち首、ゴクモンにしてやるからなあ……

藤堂 サイトー！ いるかあ〜！

別のクラスの三人組、登場。

齋藤 ハイッ！

桜木 アンタ、このクラスのあたまになつたつて、確かなスジの話？

齋藤 ハ、ハイ……

桜木 フーン。……飾りじゃないのよ、涙は。

藤堂 ダイヤとちがうの涙は。

二人、サツと左右にわかれると、一人の生徒、前に出る。

前沢 寂しいだけならいいけど、ちよつと悲しすぎるのよ、涙は。キミ、このクラスのアたま、おめでどう。これからのケントー、祈ります。ただ、それだけを言いに来ました。(三人組帰ろうとして、突然振り返る) あっ、野暮な話でなんなのですが、ひとつ聞いておきましょう。このシマのあたまはだれです

齋藤 ……。か？
前沢 キミですか？
齋藤 エッ、イエ……
前沢 では、誰ですか？
齋藤 (そちら様という仕種)
前沢 そう、そのとおりです。このシマの影のあたま、つまり裏番はあたくし、白百合のお涼りですね。よかった。実はそのことをキミがすっかり忘れていたのではないかと心配してやってきました。そう、それを聞いて安心しました。では、ごきげんよう。(目をチカッと光らせ去る。その後を去りながらオス！オス！と掛け合いをする藤堂と齋藤)
齋藤 ッタクヨ。最近のワケエ奴は態度もでかきやズータイもでけえ。あんなのがはびこつてるからこの学園の風紀は乱れる一方だあ……。
藤堂 サイトオー！ いるかあ！ (再び三人組登場)
桜木 保科二三子っているかあ。
齋藤 (そちらですと保科を指さす)
前沢 あなたが保科二三子さん？ そう。七つ森には気をつけることね。特に藤波のゆうれいにはね。(三人、先程と同じく退場)
齋藤 保科、お前えらいんだなあ。尊敬しちゃうよ。裏番長様とも知り合いで、藤波のゆうれいとも知り合いなんだもん。すげーな。
保科 ……藤波のゆうれい！？

桂木 みなさん、知ってました？ 第2トイレの右から3番目に入ると紙くれ、紙くれ！ って言う声が出て、下から青い足が出るそうなんです、あれ、ほぼ非科学的なうわさですよ。
齋藤 桂木、お前、話の腰、折るの好きだなあ。
大谷 そんなことないわよ。藤波のゆうれいって出るって話よ。
生徒達、藤波のゆうれい話に花が咲く。
始業のベル。

— 一時間目 算数 —

算数の教師木下、あわただしく教室に入ってくる。

齋藤 起立！ 礼！ 着席！
木下 教科書をとじて、考えないで即、答えなさい。

(即興) 簡単な算数の足し算、引き算などを次々と出す。指さされた者は即、答えなければならぬ。問題は毎回変わる。問題は簡単だが、即答を要求されるため、ただならぬ緊張感が満ちみちる。

木下 1 たす 5
 藤波 6。
 木下 2×7
 大谷 $\vdots 14$ 。
 木下 おそーい。 2×4
 桂木 8。
 木下 1 足す 1
 齋藤 $\vdots 2$ 。
 木下 おそーい、齋藤！たるんどるぞ、先生の顔をよく見ろ。口が曲がっどるぞ。
 どうしたんだ。 2×3 、桂木。
 桂木 6。
 木下 よーし、先生は桂木が好きだ、2 足す 1！
 齋藤 3。
 木下 2、4、6、8、次の数は。
 大谷 10。
 木下 2 2 さんが 4 (答えを言ってしまったて、あわてる)
 桂木 そうです。
 木下 バカにするな！今、バカにした、先生のことをバカにしただろ！みんな、
 どっかたるんどるぞ。先生なんかすぐく張り切ってるんだぞ。そうだ、ヨシ、
 とつておきの「ハリキリ虫」を教えてあげる。前へ出なさい。毎日、先生は
 出がけにひと踊りしてくるんだ。いいかあ、

生徒 ♪ハリハリハリ キーリキーリ はい、どうぞ！
 ♪ハリハリハリ キーリキーリ
 木下 ♪ハリキリ虫は金持ちだ ハリハリハリ キリキリマイマイ
 生徒 ♪ハリキリ虫は金持ちだ ハリハリハリ キリキリマイマイ
 木下 座ってよろしい。桂木、君の目は涼しげだな、いいぞ。
 桂木 ありがとうございます。
 木下 教科書を開いて。ページ問 2、桂木、読んでみなさい。間違えたら承知しないよ。
 桂木 // 計算を、しましょう //
 木下 よく読めた。ではその問 2、前から二番目の問題、やってみなさい。出来た
 ものは、手を上げて。遅い、遅すぎる、時はどんどん過ぎていく。光陰矢の
 ごとし、鉄は熱いうちに打て、ブタに真珠か……
 桂木 ハイ！
 木下 よし桂木、間違えたら承知しないよ。
 桂木 4 6 です。(拍手)
 木下 あってる。あってるが遅すぎるんだよ。みんな、夏休みには随分思いつきり
 遊んじやったみたいだね。先生の目はちくわじやないんだ。今のは一学期の
 復習だよ。こんなのがわからないようだ、これからどんどんわからなくな
 っちゃうの。殆どわからなくなっちゃうて、全くわからなくなっちゃうの。
 君達が勉強しなきゃいけないことは、いっぱい、いっぱいあるんだ。分数、
 体積、集合、証明、微分、積分、関数、概数。教科書なんか見てる暇ないの。

君達は、算数ともっと仲良くならなきゃダメだ。秘訣は算数と仲良く手をつなぐこと、わかるね。

夏目 どうやって手をつなぐんですか？

ばか！ 夏目、どうしてそういうことを聞くの。算数に手があるわけないでしょ。気持ちでしょ、気持ちの問題なの。先生は、算数と君達の友情のことを言ってるの。友情を結ぶのは何も人間に限ったことではないのよ。ほら、目をつぶってごらん。暗闇の中に、まだ解かれずさまよっている沢山の問題達のことを思っごらん。この埋もれた問題達に光をあててあげたいとは思わないか。ピタリあつた答えをプレゼントしてあげようとは思わないか？それが友情の手をさしのべることなんだ。算数は君達を裏切らない。公式は君達を裏切らない。答えは君達を裏切らない。裏切るのはいつも君達だ！ 君達のその怠惰が算数の未来を裏切つてゆくんだ。算数と仲良くなりたまえ。そうだ、先生が出した夏休みの「仲良し宿題帳」を提出しなさい。

生徒達はそれぞれ宿題を提出する。

木下 保科、宿題は？

保科 ……なくしました。

木下 ……宿題をなくした？

保科 はい。

木下 どこに？

保科 森の中に。

木下 ……君は自分が何を言っているのかわかっているのか。

保科 ……。

木下 放課後、職員室に来なさい。

保科 はい。

木下 よし、では計算問題をやってみよう。夏休み、みんなが算数と仲良しだったかどうか、先生にはすぐわかるんだから。いくよ。

$$x+2y=x-3y+z+3=2x-3y+z=7$$

桂木 先生、そういう問題は宿題にはありませんでした。

木下 桂木、よくわかったね。そうなんだ、これは中学の問題なんだ。驚いた？

桂木 はい、こわかったです。

木下 まだまだこんな問題もあるんだ。 sin, cos, tan,

生徒 エーッ！

木下 まだまだ、 tan α_0 , tan($\alpha_0 + \alpha_1$), tan($\alpha_0 + \alpha_1 + \alpha_2$)

生徒 エーッ！ (生徒騒然)

木下 まだまだ。こんなことで驚いていたら数学者にはなれません。こういう問題がある。「無限を教えよ」。先生はこの問題に驚いちゃって、数学者になれなかつたんだ。

大谷 先生、桂木さんが気絶してます。

木下 桂木、桂木、桂木、桂木。そうそんなにこわかった？

桂木 こわかったです。

木下

そうか、そうか！ よし、じゃあ今度は気分を変えて、もっと楽しい問題をやってみようか。みんな探偵になったつもりで解くように。先生は金田一先生になるぞ。いくよ！

ゴーン、ゴーン、ゴーン……寺の鐘が夜の訪れを告げる大菩薩峠の黄昏どき。一陣の風が竹林の沈黙を破り、峠の坂道をなめるように吹き抜ける。ペロリンチョーン。おりしも、山の端に今にも沈まんとする落日は白い坂道を真っ赤に染めて、あたかも山が赤い舌をペロリと出して峠の裾野、鬼こべ村を飲み込まんばかりの形相である。その時、峠のてっぺんに、まさに喉仏のごとく立ち現れた一人の男があった。男は今来た道を振り返りやがておもむろに、鬼こべ村へと、そのものうげな視線をなげかけた。と、その時……

〈即興・終業のベルまで〉問題は毎回変わる。うっかり開きのがすと答えがわからなくなるので、とにかく注意深く聞くことが大事である。

木下

ピョコピョコピョコ、かえるピョコピョコみピョコピョコ、あわせてピョコピョコむピョコピョコ。あ、かえるの行列。いち、にい、さん、しい、ご。と、その時、かえるがいつせいに、ピョコピョコピョコピョコピョコピョコ……と、逃げた。見ると、草むらから女の人が出てきた。にゅーっ！とだ。何をしていたんだろうと男は考えて、声をかけようとしたが、かけてはいけないような気がして……だから、俳句を読んだんだ。「にゅーっ！と出た女の人には知らん顔」その出来栄えに男は我ながら感心してしまつて、男は走り出した！

イタタタタタ、男はこけてしまった。見ると、ロンドンブーツのかかどが20センチ引く3センチになつてた。その時、どこからか声が聞こえてきた。

「おーい 中村くんちよいとお待ちたまえいくら新婚ホヤホヤだとして伝書鳩でもあるまいものを、昔なじみの二人じゃないか、たまにやつきあえ、いいじゃないか中村くん……なつかしかったあ。見ると、おーい 中村くん」を歌いながら、赤ん坊を背負つたおばさんが田植えをしているんだ。「おばさん、おばさん！」と男は手をかけた。おばさんが振り返つた。そのおばさんの顔は、なんと、おじさんだった。その時、鳥の声が「クワァー、クワァー、クワァー」ぬえの鳴く夜はおそろしい。……さて、これは、問題そのものの中に答えが隠されている、そういう問題なんだ。さあ、答えが君達を待っている。見つけてあげたまえ。行くよ。鐘は、ゴンゴンゴンと何回鳴つたか。

生徒
生徒

はい！
三回です。

と、いった具合に問題を次々と出す。生徒は夢中になつて手を上げ、答える。終業のベル。ベルの音も聞こえず熱中する木下。

斎藤
木下

先生、ベルが鳴りました。
えっ、鳴つた？
はい、鳴りました。

木下 そうか、残念だなあ。これからが面白かったのに。じゃあ、続きは明日やろう。
齋藤 起立、礼！
木下 みんな、いい顔してるよ。

木下、退場。

—休み時間—

こわいこわい算数が無事終わり、胸なでおろしながらも、文句たらたら
の生徒達。そこへ体操服姿の隣の生徒が通りかかる。

隣の生徒 こつちよ、こつちよ。ウフフ、ウフフ、この教室よ。エヘエヘエヘ。

三人はこのクラスの窓にギューギューに顔をのぞかせる。

隣の生徒 ウフフ、ウフフ、エヘヘ、エヘヘ、エヘヘ。

齋藤 おまえら、気持ちわりーなあ。何なんだよう。

桜木 ウフフウフ……ねえねえねえ、ちよつと、ちよつと（夏目に手招きする）このクラスのさあ……

齋藤 オイオイオイ、ちよつと待ったあ。スジつてものを忘れてないかあ。このク

ラスのことだったら、まず、委員長！ な、何だよ。言ってみろ、聞いてやる。

桜木 ウフフ……このクラスに七ツ森に行った人、いるんだって？

齋藤 七ツ森？……おお、そうなんだよ。な、保科。おい、それがどーしたって言うんだよお。

桜木 前沢 七ツ森、へへへ……

藤堂

桜木 またの名を、

三人 #うらめしやの森#ウフフ、エヘヘ……。

桜木 保科さん、よく帰ってこれたわね。私、尊敬しちゃう。エヘヘエヘヘ。

前沢 たいしたものよね。エヘヘエヘヘ。

藤堂 怖いもの知らずよね。エヘヘエヘヘ。

三人、意味ありげにウフフウフフと笑う。

桂木 あなたがた、そういうのを奥歯にもの挟まった言い方っていうんですよ。

歯、磨いてから出直して来て下さい。

桜木 エヘヘエヘヘ、保科さん、知ってる？ 藤波朋子って。

保科 知ってる。

桜木 ウフフウフフ、でも、これは知らないでしょ。藤波朋子は今でも七ツ森の中で、さまよってるんだって。

保科 知ってる。
斎藤 そうだよ、その手の怪談話はこちとら卒業したんだよ、バーカ。
桜木 ウフフウフフ、だってね、だってね、うちのお姉ちゃんが言ってたけどね、この教室、藤波さんのいた教室でねえ、エへエへへ、〃呪われた教室〃って言われてるんだって、ウフフウフフ……。

斎藤
桂木 ギョエー！

夏目 あんたのお姉ちゃんの言うことなんて、あてになんないわよ。
桜木 ウフフ、だってね、だってね、うちのお姉ちゃん言ってたけどね、前から四

番目に座った人は呪われて、必ず姿を消しちゃうんだって、ウフウフフ、いち、にい、さん、し……あーっ、やっぱり、保科さんだ。かわいそー。保科さん、その机ね、藤波の机って言われててね、花が飾ってあったんだって、ウフフ、で、その花っていうのがね、いつまでも、いつまでも枯れないんだって。

四人 ギョエーッ！

夏目 そ、それは、ハイポネックスが入れてあったのよ、きつと。

木下 そうよ、それに造花だったかもしれないじゃないねえ。

斎藤 そう、そうだよなあ、もしかしたら、ドドドド、ド、ライ、フラワーっうこともありえるしな、ハハハハ……。オイオイオイ、夏目、この手、離せよ。

夏目 いやだ！

斎藤 なあ、なあ、ホッシナー。(保科の手を握っている)たよりにしてるからな。

保科 大丈夫よ。私、全然平気。全然怖くない。会ってみたいぐらいだもん。

夏目 保科さん、つおーい！

保科 だってね、私ね、藤波さんは森の中で生きているような気がするの。

桂木 四年も森の中でですか？

保科 うん、生きてるような気がする。でもね、もし幽霊だったとしても、なんか話してみたい。

夏目 保科さん、つおーい。でも、なに話してるの？

保科 〃幽霊ってどんな気持ち？〃とか……。

桜木 ウフフウフフ、ねえ、保科さん、品川巻き好き？

保科 好き。

桜木 ホラネ、やっぱり、そうだ。エへへ……。

四人 ！？

前沢 ゆでたまごとなまたまご、どっち好き？

保科 ゆでたまご。

前沢 藤波朋子もゆでたまごが大好きだったんだって！

斎藤 オイオイオイオイ。

藤堂 保科さん、足の爪、親指から切る？ それとも小指から切る？

斎藤 保科、いいか、ちゃんと考えて答えろよ。

保科 ウーン、オヤ……コユ……コユビ！

藤堂 ワッ、ゼツボウテキ！

桜木 藤波朋子と一緒に。うちのお姉ちゃん、そう言ってた。ウフフウフフ。

始業のベルが鳴る。隣のクラスの三人組、外へ飛び出していく。
ベルの中、四人は窓から顔を出して、

木下 あんたのお姉ちゃんは、藤波さんがコユビから爪切るの見たことあるの!?

斎藤 バカヤロウ、親だつてめつたにそういうこと知らないんだよ!

桂木 私、あなたのお姉さん、デバガメだと思ひます!

夏目 お姉ちゃん、お姉ちゃんつて、あんた、お姉ちゃんの何なのよ!
……。

全員

遠くから、

桜木
前沢
藤堂

妹に決まつてるでしょ!!

夏目、みんなにもみくちゃんにされる。

唐突に歌を踊りて始まる。“Happy Birthday Sweet Sixteen”

Tye la la

Happy Birthday Sweet Sixteen

Tonight tonight, I've been waiting for

Because you're not a baby any more

You've turned into the prettiest girl I've ever seen

Happy Birthday Sweet Sixteen

What happened to that funny face

My little Tom boy now wears satins and lace

I can't believe my eyes

You're just a teenage dream

Happy Birthday Sweet Sixteen

When you were only 6

I was your big brother

Then when you were 10

We didn't like each other

When you were 13

You were a funny valentine

But since you're grown up
Your future is sewn up
From now on you're gonna be mine
So if I should smile with sweet surprise
It's just that you're grown up
Before my very eyes
You're turned into the prettiest girl I've ever seen
Happy Birthday Sweet Sixteen

歌いながら、英語教師、大谷が登場する。

Ohtani Hello, girls. How have you been?

(大谷 はい、みんな、元気だった?)

Students Fine thank you, Miss Ohtani.

(生徒達 ええ、とても元気です、大谷先生。)

Ohtani I'm happy to see you all again.

(大谷 まだ、みんなに会えて私、とってもうれしいわ。)

Students We're happy to see you, too!

(生徒達 私達もです、先生。)

Ohtani Did you have a good time on your summer holidays, Miss Kinoshita?

(大谷 夏休みにすてきな思い出はできたかしら。木下さん、どうだった?)

Kinoshita Yes,...

(木下 はい。(即興でカタコト英語に身振り手振りで夏休みの思い出を話す)

Natsume Miss Ohtani, We have a big news. Saitoh-kun was elected as class leader.

(夏目 先生、ビッグニュースです。斎藤君は委員長に選出されたんです。)

Students Yeah!

斎藤 するいんだよ、みんな。

Ohtani Oh no, Miss Saitoh. Don't use Japanese in this class.

Speak in English.

(大谷 おお、斎藤さん、この時間は日本語で話してはいけません。すべて英語で話しましょう。)

斎藤 ……。

Ohtani Speak in English in this class.

(大谷 エ・イ・ゴで話しましょう。)

斎藤 ナニ。

Ohtani Miss Saitoh, even if you think it's hard for you now, you will soon find that it's good you've done it. It's important to get used to, if you want to speak a foreign language.

(大谷 斎藤さん、今はつらくても、いつかきつと良かったと思う時が来るわ。外国が上達するには習慣が大切なのよ。)

齋藤 オイオイ、何言ってんだよ、このチンコロ姐ちゃん。なあ、木下あ、このチンコロ姐ちゃん、なんて言ってるんだあ。

Ohtani Chin...koro...neituan? Chinkoro-neituan...She said Chinkoro-neituan?

I beg your pardon?

(大谷 チン...コロ...ネーチャン、チンコロ姐ちゃんって言った？ 何て言ったのかしら、あなた。)

齋藤 チンコロ姐ちゃん。

Ohtani Oh, no, Chinkoro-neituan. Oh, I am Chinkoro-neituan?...Oh, no, Oh, ...Chin koro-neituan...Oh, no...Hey, Miss Saitoh, you are Bobo-brazil!

(大谷 まあ、チンコロネーチャン、私がチンコロ姐ちゃん？ ちがうわ...ひどい...ちよっと、齋藤さん、あなたはボボ・ブラジルよ！)

齋藤 ボ、ボ、ボボ・ブラジル?...I am Bobo-brazil?...Oh, no, Bobo-brazil...Bobo...Bobo, Bobo-brazil!...Yes, I am Bobo-brazil!

(齋藤 Hey, you are bloody fuckin' stupid チンコロ姐ちゃん！ 私がボボ・ブラジル...ひどい！ ボボ...ボボ、ボボ・ブラジル...そうよ、どうせ私はボボ・ブラジルよ！ あんたなんか、超パーのチンコロ姐ちゃんよ！)

Ohtani Oh, no, shut up. Hei, come on, crazy. Oh, no, You never use that word.

(大谷 まあ、ひどい。だまんなさい！ ちよっと来なさい、おばかさん。二度とそんな言葉言うんじゃないわよ。)

大谷、すごいけんまくで教室を出る。齋藤、その後が続く。

Hoshina Every body, come on, come on.

(保科 みんな、ちよっと、来て来て。)

保科、木下、夏目が二人を止めようと、外へ出る。

〈即興〉二人、英語で口喧嘩をはじめ。他の生徒もそれに加わる。英語でおいつかないところは、身振り手振りでカバーする。とにかく理屈にあおうとあうまいと、知ってる限りの英語を駆使して喧嘩すること。

Ohtani Oh, sorry, no, you are not Bobo-brazil. You are ガリバー旅行記！

(大谷 まあ、ごめんなさい。あなたはボボ・ブラジルじゃないわ。あなたはガリバー旅行記よ。)

Saitoh Oh, no, Hey! You are not Chinkoro-neituan. You are コロボックルちゃん！

Ohtani Oh, you are ジャックと豆の木の豆の木！

Saitoh Oh, you are 白木みのるちゃん！

Ohtani Oh, you are キングコング！

Saitoh Oh, you are オランウータンの子！

Ohtani Oh, you are ハイリハイリフレハイリホッホー！

Saitoh Oh, you are ハイホーハイホー、ハイホーハイホー！

仲裁するはずの生徒達、つい勢いに乗って、一緒に騒ぎに加わってしま
う。
桂木が思いあまって仲裁に入る。

Katsuragi Miss Ohtani! Please start a lesson! You are a teacher. I am a student.
I am a girl. Are you a boy? Who are you? What time is it now?
We are the world, we are the children. A vegetable はじりの姐さんやん…。

桂木、勢いあまって言葉たらずの英語を連発したのち、嘆きのいで教
室にかけ戻る。

Students Oh, Miss Katsuragi, Oh, I'm sorry.

Ohtani Oh, no.

Katsuragi Oh, I am a girl. ニシヤ、ユウハン。

Ohtani Strange girl. Oh no, I lost myself. I lost a beautiful memory, my father,
my mother, I lost everything. Oh, gone with the wind. I lost my world!

Students Miss Ohtani, look, sunrise!

Ohtani Sunrise!

Students Yes

Ohtani Oh, beautiful and powerful, miracle sunshine.

Students Yes! (拍手)

Ohtani Oh, no. But sun sets.

Students No. Miss! Look! Sunrise!

Ohtani Oh, sunshine. Very wonderful. I like it. The sun rises tomorrow
and tomorrow, again and again.

Students Again and again!

Ohtani Again! Oh, beautiful and powerful. I remember my beautiful memory
in San Francisco. My boy friend. His name is Tony.

Katsuragi Miss Ohtani, what are you going to do with our homework of summer
vacation?

(桂木 先生、夏休みの宿題はどうしますか?)

Ohtani Oh, I forgot about it. Sorry. Give me your homework please.

(大谷 しまったな、大事な宿題を忘れたわ。ありがと。じゃ、集めて下さい。)

各自、宿題帳を提出する。保科、席に座ったままである。

Ohtani Miss Hoshina, have you done your homework?

(大谷 保科ちゃん、宿題は?)

Hoshina I lost them.

(保科 なくっちゃった。)

Ohtani You lost your homework?

(大谷 宿題をなくした?)

Hoshina Yes, Miss.
(保科 はこ。)

Ohtani But where?
(大谷 どこに?)

Hoshina In the forest.
(保科 森の中?)

Ohtani In the forest? Do you understand what you're saying?
(大谷 森? あなた、自分が何を言っているのか、わかっている?)

Hoshina

Ohtani Come to the teacher's room after school hours, all right?
(大谷 放課後、職員室に行ってください。)

Hoshina Yes, Miss.
(保科 はこ。)

Ohtani All right. Now we're gonna start from a new chapter. Open your book,
page 11 "A Mujina". Well, at first, will you please read it, Miss Kasturagi?
(大谷 では、ちいさく新しい目次に進ませよう。――頁「A Mujina」を開いてや
い。桂木先生の、読んで下さい。)

Kasturagi Yes, Miss.

§3 A Mujina

Long ago, there was a long slope in the city of Edo. It was a very lonely
place. People stayed away from the slope after dark

People walked there only in the day.
People talked about the slope.

"Don't go near the slope at night."

"A Mujina lives there."

One night, an old man was walking up the slope on his way home.

He saw a girl. She was sitting behind a tree. She is wearing a beautiful kimono.

"Why is she here at this late hour?"

The old man came up and said to her gently.

"What's the matter? Please listen! This is not a place for a young girl at
night!"

The girl did not say anything. She was crying.

"Why are you crying? Can I help you?"

The girl did not answer.

Slowly she got up, but she turned her back to the old man.

"Did you come here alone?"

Yes, I did."

"Did you lose anything here?"

"No, I didn't."

Then she moved her hand slowly from her face.

Look! She did not have any eyes, nose, or mouth. The man cried out and ran away.

ムジナの朗読が英語劇として演じられる。
終了のベル。

—三時間目 化学—

化学の教師、桂木が一人スポットライトの中に浮かびあがる。

桂木

『排他原理の発見の歴史は、私がミュンヘンで過ごした学生時代にまでさかのぼる。その発見に対して、私は一九四五年のノーベル賞を授与される光栄に浴した。私はヴィーンにおいて学生として古典物理学とアインシュタインの(当時は新しかった)相対性理論について、ある程度の知識を習得した後、ミュンヘン大学においてゾンマーフェルトを通して一古典物理学の見地からはいくぶん風変わりな一原子の構造を紹介された。古典的な思考法に慣れていた、あらゆる物理学者にとつて、また私にとつてもはじめてボーアの量子論の基本的要請に接したときには、衝撃なしにはすまされなかつた。当時、作用量と気力学を、(その論理的な一般化と考えられる)量子の言語に翻訳することに鍵を求めることによつて、新しい思考の中に抽象的な秩序

を持ち込む努力を行うことが、その本質であつた。この方向をボーアの対応原理が狙つたのである。

ゾンマーフェルトはそれに反して、運動学的な模型に関係した概念の使用が困難に直面したとき、かつてケプラーが惑星系の研究に用いたように、調和に対する内的な感情の後を追うことによつて整数の助けを借りて、スペクトル法則を解釈することを望んだ。

私には、たがいに両立し難いものとは思えない、この二つの方法が影響を与えた。元素の周期律の周期の長さを記載する、整数2、8、…の系列は、スウェーデンの物理学者リュードベリの「nが整数の列を走り過ぎるとき、上記の整理は単純なという形に表される」ということに注目し、ミュンヘンで熱心な議論がなされた。

ゾンマーフェルトは特に8という数を賽のかどの数と結びつけることを試みた。私の科学的な生涯の新しい局面は、私がニールス・ボーアと初めて個人的に巡り会ったときに始まった。それは一九二二年のことであつた」と、パウリは言っている。

さて、私とあなた方との出会いもまた、生涯の新しい局面となるであろうか、
諸君!

生徒達

桂木先生、桂木先生!

白衣の生徒諸君が、厳かに行進してくる。

桂木 偉大なる科学よ！
生徒達 偉大なる科学よ！
桂木 今日もまた、我々にその恩恵のひとかけらを与えたまえ！
生徒達 今日もまた、我々にその恩恵のひとかけらを与えたまえ！
桂木 その奥深さ！
生徒達 その奥深さ！
桂木 その不思議さ！
生徒達 その不思議さ！
桂木 そのエネルギー！
生徒達 そのエネルギー！
桂木 恐れを知らぬ進歩と発展に幸いあれ！
生徒達 恐れを知らぬ進歩と発展に幸いあれ！
桂木 ハレルヤ！
生徒達 ハレルヤ！
桂木 今日は、空気中の酸素に関する、酸性酸化化合物、五酸化リンに関する実験を行う。

木下 先生、それは何の役に立つんですか？
桂木 物理学者に次の質問は決してなされない。「困難があるのかなのか？」次の質問は絶えずなされる。「困難はどこにあり、どこにないのか？」次の質問は決してない。「何の役に立つのか？」……これらの常に論争的となる疑問

への答えはいつも、すべての状況を熟考した後にはさえ当て推量にすぎないだろう、とパウリは言っている。が、しかし諸君、恐れることはない。かのアインシュタインは我々に、物理学者がそういう足場なしに、また確固とした規則もなしに、岸辺のない観念の海の中で、いかに泳ぐかを学ばなければを教えてくれたではないか。
諸君の前には、重く厚い扉が一つ、また一つと果てもなく立ちふさがっている。が、しかし諸君、まさしくその扉こそが、諸君の未来であり、可能性なのだ。その扉は、諸君を新しい世界へと導いてゆくだろう。
そして諸君、まさしく諸君。このフラスコこそが、その扉を開く鍵に違いないのだ。そうだ諸君、まさしく諸君、未来は、このフラスコを通して諸君の前にあらわれるに違いない。さあ諸君、勇気を持って鍵をまわしたまえ。

が、しかし、未来への可能性を秘めた実験はみごとに失敗する。
轟音、爆風、煙、停電、そして絵に描いたようなパニック。
やがて訪れる荘厳なる静寂。
静寂の奥から、おおいかぶさるように森がせまってくる。

—森の中—
タモや虫かごを手に、昆虫採集の子供達の姿が現れる。子供達の目の前に大きな楠がそびえ立つ。

保科 これだ！
木下 これなんだあ！
桂木 これです。
大谷 これか。
夏目 これなの？
斎藤 これ何？
保科 これが目印の大楠よ。
斎藤 目印って何？
保科 この大楠はね、この森全体の守護神なの。それで昔から、この木のまわりに
は、いろんなものが集まりつどうって言い伝えがあるのよ。
斎藤 いろんなものって？
保科 いろんなものよ。生きとし生けるもの全て、虫も動物も花や木も、道に迷っ
た者も迷わぬ者も、そして死してなお迷える者達もまた。
大谷 花とか木も集まるの？ どうやって集まるの？
斎藤 死してなお迷える者達って何？
保科 つまり、魂のことだと思うの。目に見えないいろんなものの魂が集まってく
るのよ。ホラ、まだこの森でさまよってる、あの藤波、藤波朋子の幽霊も、
きつとこの楠にサ……。
斎藤 えー、ちよつと、ちよつと、フミちゃん、セミ取りに来たんじゃないの。幽
霊見に来たわけ？
保科 まあね。

斎藤 気持ち悪い。私やだ。そういうの、すつごくやだ。私ね、目に見えるのは我
慢できるけど、見えないナントカっていうのイヤ！ダメ！ 帰ろう！
桂木 大丈夫ですよ。それは伝説、つまり言い伝え、非科学的な作り話と言っても
いいでしょ。
保科 あら、秀ちゃん、そんなことないと思うな。言い伝えて、きつと本当に何
かあったから残ってるんだと思うよ。だって、この木見ると、何か信じら
れるような気がしない？ 私達だって、ホラ、こうやってここに来ちゃった
じゃない。
桂木 だって、それはフミ子さんが珍しい虫や、珍しいものを探すなら、ここしか
ないって、アーだコーだ言うから……私もついそんな気になって来ちゃったけ
ど、本当はあまり科学的じゃないなって不安だったけど、こうして来てみる
と、やっぱり全然科学的じゃないと思いますよ。
斎藤 ……っていうことは、何だよ。ここに変なものが出てくるって話はウソなん
だな！
桂木 ウソというか、人間の臆病な心が作り出した幻想、噂話と言えますね。
保科 火のないところに煙は立たない！
桂木 幽霊の正体見たり枯尾花！
保科 ウソから出たまこと！
桂木 針小棒大！
保科 ウラにはウラ！
桂木 大言壮語、我田引水、自画自賛！

保科 噂をすれば影とやら、待てば海路の日和あり！

桂木 ああ言えはこう言う！

保科 シーツ。

斎藤 何、何よ、フミちゃん。そういう顔、やめて。ユーレイみたいだよ。

保科 何か聞こえない？

木下 聞こえる。

桂木 虫の声。

大谷 そうお？人の声みたいよ。

斎藤 ちよつとやめてよ、そんなこと言うの。気持ち悪い。

大谷 どうして、どうして人の声が気持ち悪いのお？

斎藤 怒るよ、本当に怒るよ。

夏目 本当だ。何か聞こえる。

木下 お祭り。お祭りの声だ。

保科 どっかでお祭りやってるんだ。

斎藤 でも、どこで。

祭りの声、近づいてくる。そして、祭りの声はまたたく間に通り過ぎて行った。祭りの後の静けさ。

夏目 帰ろう。

斎藤 ウン、帰ろう。ここ変だよ。

夏目

斎藤

木下

桂木

大谷

保科

帰ろう、帰ろう。気持ち悪いよ。

私、帰らない。私は帰らないよ。帰らないぞおっと！

保科、リュックからウイスキーのビンを出す。

帰りかけていた五人、ふり返る。

五人 (口々に)フ、フ、フミちゃん！ナ、ナニ、ナニそれ。チョット、

ヤダ、オサケ：フ、フミちゃん、どうしたの、これ。

斎藤 ロイヤル・エクセレント・スーパー・サルート・エグゼクティブ。うわあ

ゴーセイじゃん！

木下 え、ゴーセイなの、これ？ 妙ちゃん、知ってるんだ。

桂木 飲酒行為は未成年、つまり二〇才以下の者には禁じられています。

夏目 ねえ、ねえ、それ、どんな味するの？ おいしいの？

保科、フタを開ける。

五人 フ、フ、フミちゃん、飲むの？フミちゃんが、フリヨーになっちゃう、フ
リヨーになっちゃう。

保科、フタについて飲もうとする。

五人 キヤ、フミちゃんがフリヨーになろうとしている。フミちゃんがフリヨーに
なる。フミちゃんがフリヨーに…

保科、ひと口飲む。

五人 フリヨーになっちゃった！。

保科 クアーツ！…飲んでみる？ 妙ちゃん。

斎藤 飲んでみる。

四人 エーツ、たえちゃんがフリヨーになっちゃう。フリヨーになる…なる、なる
…たえちゃん、フリヨーになっちゃったあ。

一人ずつ、飲むたびに「フリヨーになっちゃう、なっちゃった」の合唱
の中、盃が回る。酔いも回ってきた。

保科 秀ちゃん！ ハイ、これ！

桂木 飲酒行為は二〇才以下の者には禁じられています。

五人 まあ、まあ、そう言わずに、ちよつと。

五人、桂木にムリヤリ飲ませる。

五人 キヤア、秀ちゃんがフリヨーになっちゃう、フリヨーになっちゃう。なる、
なる、なる…秀ちゃんがフリヨーになっちゃったあ。

桂木 いやあ、そんなわけだからサ、ま、思い切つてぐつと行きましようよ。

保科、ポケットからタバコとライターを取り出して、火をつけようとす
る。

木下 フ、フミちゃん！何してるの？

五人 (口々に) キヤア、タバコ！フリヨー、フリヨー、フリヨー。フミちや
んがフリヨーになっちゃう。…フリヨーになっちゃったあ。

一人ずつ、回し喫みしていく。そのたびに「フリヨーになっちゃう。な
るなる。なっちゃった」の大合唱。アルコール、ニコチンが回っていく。

桂木 ♪晴れたる青空 漂う雲よ 小鳥は歌えり 林に森に…

大谷 ちよつと秀ちゃん、もつとカッコいい歌にしてよ。

木下 秀ちゃんへんだよ。音程はずれてるよ。

桂木 さあ、みんな一緒に：ハイ！

かまわず歌い続ける桂木。

五人 やめろー、やめろー。

桂木 あのですね、子供じみたバカさわぎをしたり、バカバカしい唄を歌ったり、夢中になると、出ることあるんだって。

大谷 出るって？

桂木 ユーレイ！

木下 秀ちゃん、それ、非科学的じゃありませんか？

桂木 いえ、これは村の言い伝えとは違います。科学的な事実です。

保科 子供じみたバカさわぎって、どういうこと？

斎藤 ユーレイって、ふ、藤波の？ ヤダあー。

桂木 あのですね、ワトソン博士によると：

大谷 ダアレ？

保科 イギリスの偉い博士。

桂木

そうです。動物行動学の科学者です。その偉い科学者が言ったんです。意識的に子供達のようにふるまったり、バカバカしい唄を歌ってみたりすると、自由に念力の働く状態、例えばポルターガイストをおこすことができるようになる。こうした意志の念力の受容は、意識的に子供っぽい方法を使う中で、通常の約束事や責任を停止することによって、一層助長される…

斎藤 チョット、チョット、秀ちゃん、わかって言ってるの？

大谷 つまり、大人が子供じみてバカバカしい唄を歌うと、一層助長される…。

斎藤 ナニがある？

保科 子供じみてって、どういうこと？

桂木 あのですね、ですから、意識的に子供っぽい方法を使う中で、通常の約束や責任を停止することによって、一層助長される…。

斎藤 チョット、チョット、秀ちゃん、わかって言ってるの？

大谷 つまり、大人があ、子供っぽくするとお、イッソー、出るのお？

桂木 まあ、そんな風に言えるでしょう。

保科 子供っぽいって、どういうこと？

木下 じゃあさ、子供はどうすれば出てくるの？

大谷 もっと、うーんと子供っぽくすれば、出るのかなあ…。

保科 だから、子供っぽくするって、どういうふうにするの？

木下 だからあ、子供は子供なんだから、どんな風にしても子供なんじゃない？

夏目 ねえ、って言うことは、子供が大人っぽくしたら、つまり出るの？出ないの？

斎藤 大人っぽくするって、どうやるの？

桂木 それは…こういうんじゃないですか。たとえば…夜風は体によくないよ

五人 えー、ヘンな大人。

夏目 じゃ、子供っぽいって言うのは、どういうの？

桂木 "ヨカゼはカラダにヨクナイヨ"

五人 (口々に) それ、ビョーキみたい。そんな子供いないよ。こういうんじゃない

いかな、大人って……

それぞれ、大人っぽいと思われる様子、仕種とその子供版をやってみる。どーもわからない。大人っぽいことと、子供っぽいことは何によって区別されているのだろうか。わからなくなってしまう。

保科 秀ちゃん、出ない。何にも出てこない。

大谷 そうよね。私、ワリかし一生懸命やったつもりなのに、大人っぽいこと。別に出なきゃ出ないでいいんだけどサ。子供っぽいことすると、出るってホントなわけ？

木下 いやだ。どうせやるんだから、絶対、何か出てほしいよ。ねえ、秀ちゃん。集団的な意志の念力の受容は、意識的に子供っぽい方法を使う中で、通常の約束事や責任を停止することによって……

保科 子供っぽいって……なーんかへん。なーんか違うような気がする。

夏目 え、何かまちがったの？ やり方。

保科 えーとね、思うんだけど、子供でも、大人でも、バカバカしい唄を歌っても、立派な唄を歌っても、出る時は出る！

夏目 ホント？ じゃあ、どうやればいいの？

木下 出る時は出るって……どういうこと？ 出ないよ、さっきから、なにやっても……ウーン。

大谷 出ないわよね、ナンにも！ 何をすれば出るの？ ねえ、フミちゃん。

保科 ……あ、セミだあ。

全員、セミに向かって全速力でダッシュする。
森のどこからか一人の見知らぬ少女が、タモを持ってセミに向かって走ってくる。六人の子供達にまじって、タモを構えてセミをつかまえようとする。そのまま、セミを追って森の奥へ行ってしまう。
保科はその気配を感じる。

斎藤 やだ、やだ、ちよつとなーに、なによ……幻覚かな。

大谷 そうよ、そうよ、幻覚よ。今のは、ねえ、ハハハハ……

木下 ねえ、出ないよ。出てこないじゃない。フミちゃん、本当のこと言ってるわけないんじゃないの？

保科 大丈夫。いつかは出るってば。

木下 いつかって、いつよ。私、ユーレイに会うのなんて生まれて始めてだからサ、楽しみにしてたのに。

夏目 ねえ、ねえ。ほんとは、いけないんだよね、こんなとこに来ちゃ。先生に怒

られちゃうよねえ。見つかったらさ、大変だよね。

木下 ねえねえ、そろそろ帰ろっか。ね、フミちゃん。

保科 まだだよ。これからだよ。

桂木 これからだなんて、イヤアだあ。ちよつと、フミ子さん、もうお開きにしましょうよ。ね、ま、かたいこと言わずに。ま、なんですよね、ハハハ、ブレ

保科 イコウ、ブレーコー……
あ、セミだあ！

六人の子供達、それぞれ、その方向に走る。どこからか、見も知らぬ、どこかで見たことのある一人の少女が再び全速力で走ってくる。タモを構えてセミをつかまえようとする。
そのまま、セミを追って森の奥へ行ってしまう。
祭りの声が近づいてくる。姿のない祭りは近づき、そしてまた通り過ぎていく。
静寂。

桂木 帰ろう。
斎藤 帰ろう、帰ろう。
保科 私、帰らない。
木下 フミちゃん、私も帰った方がいいと思う。
保科 だってまだ何も見つけてない。誰にも会ってない。
夏目 会ってないって、誰に会うの？
保科 だから、藤波朋子のユレーイ。
桂木 そんなムキになって会わなくてもいいよ、フミ子さん。
斎藤 そうだ。別に、もう会わなかったっていいよ。
大谷 帰ろ、帰ろ。

みんな、帰ろうとする。

保科 みんなの弱虫！ いくじなし！ 一緒に探そうって言ったじゃない。絶対見つけようって言ったの誰？ いいよ、みんな帰ればいいよ。私はここにいる。
弱虫は帰ればいい。
木下 フミちゃん、そんな言い方しないでよ。
大谷 言っとくけど、私は弱虫じゃないからネ。
夏目 私だって弱虫じゃない。
保科 じゃ、証拠見せてよ。
桂木 証拠って？
保科 弱虫じゃない証拠！
大谷 そんなの簡単よ。あのねー、私ね、小っちゃい時にネエ、犬にお尻をガブツて噛まれてネエ、噛まれたまんま歩いたんだヨ。でも、泣かなかったヨ。
五人 ヘー、ツヨイ。
夏目 そんなこと言うんだったらネ、アタシなんかネエ、小っちゃい時ネ、お父さんと屋根でペンキぬりしててネ、強い風が吹いて屋根から落っこちて頭打ったけど、全然泣かなかったんだよ。
五人 スゴイ。ツヨイ。
桂木 そんなコト言うんだったらネエ、アタシなんかネエ、小さい時にネエ、二階からネエ、「お母さん、おせんべい」って言って一番上の階段からネエ、一番下までドーンって落ちたけどネエ、そのまま「お母さん、おせんべい」って

言つてネエ、泣かなかつたヨ。

保科 エーッ、食い意地が強い。

五人 スゴイ。

木下 そんなこと言つたらネエ、アタシなんか一ヶ月お風呂に入らなかつたんだよ。そしたらネエ、手のここんとこ赤ギレができたのネ、それなのにジャンケンでグー出したんだよ。痛かつたんだよ！

五人 ワア、キタナイ。

斎藤

あ、そんなこと言つたら、アタシなんかネエ、一歳にもならない時にネエ、お母さんがアタシをお風呂で洗おうとしてネエ、お風呂のフチにアタシを座らせて洗おうとしたらネエ、お風呂に落っこちちゃってネエ、赤ちゃんて頭が大きいからネエ、さかさまになつてバタバタつてして動かなくなつてネエ。で、お母さんがもう死んだと思つて起こしてみたら、生きてたんだよ。

大谷

保科

ヘエー、息が強いんだ。
そんなこと言つたらネエ、アタシ、生まれて三ヶ月目の時に目ヤニで目がつぶれちゃつたんだよ。でネエ、半年目にバツと目が開いたんだから。で、親指の生ヅメなんか同じと二回もはがして、二回目なんかネエ、ブラブラしてるの自分でちぎつたんだよ。魚の目なんかネエに三つもできたんだよ。三ついつぺんに取つたんだよ。扁桃腺とアデノイドなんていつぺんに取つたしネ、腸重積でおなか切つた時についてに盲腸だつて切つたし、犬に噛まれたこともあるしネ、猫にも噛まれたしネエ、猿にだつて噛まれたことあるんだよ。でネエ、海でも溺れたし、プールでも溺れたし、ちゃんとお風呂でも

溺れたんだよ。

桂木 ヘエー、体が弱いんだネエー。

木下 でも、運が強いよ。普通、死んでるよ。

大谷 奇跡だよ。

斎藤 強いよネ。

木下 アタシだつて強いもんネ。

夏目 でも、アタシ、それだけじゃないよ。他にもあるよ。

大谷 アタシもある。

口々に自分の強さを言いあう。

保科

あ、セミだ。

全員、セミに向かってタモを構える。

一人の見知らぬ少女が、森のどこからか全速力でセミをめがけてやつて来て、セミを追つて森の奥へ入っていく。保科、その気配をはっきり感じる。

祭りの声、また近づいて、通り過ぎる。

皆、くたびれてくる。帰ろうという気力もなく座りこんでいる。

大谷 今、何時頃かな。

斎藤 アツ、暗くなった。
木下 気のせいよ。
夏目 寒くなってきた。

大谷 いつまでここにいろの？

森は夜の闇に覆われる。

斎藤 もうどれくらいだったのかな？

桂木 祭りが四回通り過ぎました。

大谷 ママが心配してるだろうな。

夏目 私達のこと探してるかもしれないよ。

保科 あ、セミだ。

木下 フミちゃん、どこ行くの？

祭りの声が聞こえてくる。

桂木 フミ子さん、そっちへ行ったら迷ってしまいますよ。逆ですよ。帰れなくな

りますよ。

斎藤 フミちゃん、はぐれちゃうよ。

子供達のひきとめる声は、祭りの声にかき消されていく。やがて、子供

達の声も祭りも遠ざかっていく。

保科 あ、セミだ。

森の暗闇の中、保科は夢中で何度もセミを見つけ、つかまえようとす。その声に誘われたように一人の少女がセミを追って全速力でやってくる。つかまえそこなっては消えていく。

保科 あ、セミだ。

少女、つかまえそこなってほのかな明かりの中に立ち尽くす。

その少女は、四年前、七ツ森に行って行方不明になった藤波朋子だ。

藤波

夕べ、子供が私にこうたずねるのです。

「お母さん、地球はまわっているのに、どうして私達はおっこちないの？ど

うしてさかさまに、お空におっこちないの？」
その娘の顔は二十数年前の私の顔でした。私はいつごろから、そういう不安を忘れていったのでしょうか。不安が解決されたのではない。ただ忘れていただけだという想いが突然、私を襲いました。私の小さな記憶の城にも、どれだけたくさんの欠落した時間があることでしょうか。まるで、あと四、五人の別人が生きていたかのように、身に覚えのない行動や言葉が忘却の岸辺に打

声 ち上げられているのです。時々、記憶喪失者が抱く、あの漠たる不安が……
ずれてる、ずれてる。藤波さん、藤波さん、ずれてる。ずれてますよ。どん
どんずれてますよ、藤波さん。

四年前の、あの森から、ずっとあの台詞を言い続け、それを果たし終え
ていない藤波。
あなた上方から、光がさし、声が降りてくる。藤波はその指示を仰ぎな
がら、位置を修正しようと試みる。

声 まだ、ずれてる。もっと上手です、上手。そっちは下手でしょ。上手ですよ。

保科が見かねたように藤波の位置を直す。

藤波 夕べ、子供が私にこうたずねるのです……

声 ずれてる。ずれてる。藤波さん、ずれてますよ……

保科、位置を直す。

藤波 夕べ、子供が……

声 ずれてるって、藤波さん。わかってますか？……今ので一六七二回目ですよ。
ちゃんと、覚えてないんじゃないの？

藤波 覚えていません。

声 考えすぎてはいませんか？

藤波 ……

声 結果を期待してませんか？ ハイ、もう一度。

藤波 夕べ、子供が……

声 藤波さん、心は静かですか？

藤波 ……

声 まちだ。

藤波 だちま。

声 ごとくとくじ、

藤波 じ……くと……う……

声 そしがやおおくら、

藤波 ……ら……く……お……

藤波さん、表現というものを分析してみると、二つのことが言えます。一つ
は、心と形と場、つまりX、Y、Zのそれぞれの値によって定められたベク
トルのことをいう。

藤波 ……もう一つは？……

声 ……忘れました。

藤波 ……！？

声 ……よよぎはちまん、

藤波 ……ん……ま……ち……ぎ、

声
藤波さん、つまり、あなたの言葉をあなたの身体に返してあげればいいんですよ。ハイ、もう一回。

藤波 ……夕べ、子供が……

声
ハイ、休憩！

藤波、ひざを抱えて座り込む。つかまえられるいセミを、ずっと見つめたまま。

保科 藤波さん、藤波さんって、いつもここに居るの？いつも何食べてるの？いつ眠るの？友達いるの？

藤波 ……

保科 ……ねえ、私さ……私ねえ、中学二年の時、日曜の朝だったんだけど、なんで、私って外人じゃなかったんだろうって思ったことあるのね。アメリカ人で金髪で、ニューヨークのグリニッチ・ヴィレッジに住んでる、アーティスト絵描き。もちろん、ポスト・モダンよ。あ、それで、あれはね、二五才の時だったかな、寝る時、電気消したの。で、まっ暗になったら突然、なんでかわからないんだけど、私、スイスの羊飼いだったらよかったの。って思ったの。おじいさんも、またそのおじいさんも代々羊飼いやってて、自分も羊飼いの。毎日、羊を山に連れて行って、お弁当はパンとチーズだけで、日が暮れると家に帰ってくる、そういう羊飼いになりたかった。あ、この間、ヤキイモ食べてたの。そしたらムネにつかえてムググ……ってなったの。そ

の時、ああ、サザエさんちのカツオくんになりたいなあと思った。そう思ったりすることない？これから何になりたくなるか、わかったもんじゃやないよね。七〇才になつてさ、フトンに入った時、何になりたくなるんだらう。どらえもんになりたくなったりしたら、どうしよう。もっと、もっといろんなものになりたくなるのかな。それとも、なりたくないもの、なくなるのかな。やめる？

藤波 ……ウウン。

保科 とる？

藤波 ……ウウン。

保科 絶対、とる？

藤波 ウウン。

保科 ……セミだ。

その言葉が開始の合図のように、藤波は立ち上がる。

藤波

夕べ、子供が私にこうたずねるのです。

「お母さん、地球はまわっているのに、どうして私達はおっこちないの？どうしてさかさまに、お空におっこちないの？」その娘の顔は二十数年前の私の顔でした。私はいつごろから、そういう不安を忘れていったのでしょうか。不安が解決されたのではない。ただ忘れていただけという想いが突然、私をおそいました。私の小さな記憶の城にも、どれだけたくさんの欠落した時

間があることでしょう。まるであと四、五人の別人が生きていたかのように、身に覚えのない行動や言葉が忘却の岸辺に打ち上げられているのです。時々、記憶喪失者が抱く、あの漠たる不安が、私はどこから来てどこへ行くのか、私は何者なのかという生存の不安が、等しくこの私の上にもおし寄せてくるのです。殊に、こんな鮮やかな月夜の晩には、ひたひたと満ちてくる不安が、私の忘却の扉をたたくのです。扉の向こうには、たくさんの私が、時には昆虫採集の子供達の姿を借りて、果たせなかつた夏休みの宿題を、も追いかけているのかもしれない。森の奥へ奥へと、背を向けて駆けてゆく後ろ姿が、私を誘うようです。生き生きと光り輝く、エナジーの源へと導くようです。

つかまえない、もつと、もつと、たくさんのお虫を、もつと、もつと珍しいものを、そして、何よりもまず、あの子供達の後ろ姿を。

やがて、藤波の姿は、森と共に遠ざかってゆく。

保科は、その様子を見守るともなく見ている。

やがて、おもむろにタバコを吸い始める。聞こえるか聞こえないかの小聲で、藤波と同じ言葉をつぶやいている。

—七月堂の夏祭り—

森の奥深く、ほのかに光る明かり。

衣をひるがえし、森の奥へと走り去る鬼。

やがて、太鼓の音が聞こえ、森の奥から祭りがあらわれる。

おはやし、太鼓、ねり歩くダン、殺気だつ若衆達。

と、そこに何としたことか、〃日本一〃の桃太郎、登場。

暗黙のうちに対立する桃太郎と若衆達。誰かが刃ものを出したのをきっ

かけに喧嘩がはじまる。

勝負はあつてなくついで、声もなく倒れる若衆。悲鳴と共に、クモの子

を散らすように逃げ去る群衆。一人、放心したように立ち尽くす桃太郎。

ふと、我に返り、あたりを見回すと、そこは、前と同じ森の中。

殺したはずの若衆は、一匹のセミになっていた。

セミの声、狂おしくふりそそぐ。

H・R・T夏目、横切る。

夏目 放課後、職員室に来なさい。

保科、足元の虫を拾い、奥の扉に消える。

舞台は、森の中からP・T・A会議室へと場面転換。

同時進行で、斎藤が舞台中央にて、子供服姿から校長先生の姿に衣裳転

換。

声 校長先生、お母様方がいらつしやいました。
校長(斎藤) お通しして下さい。

— P・T・A —

P・T・Aのお母様方、登場。
まるで、ゲームでもしてるような会話をしながら、給食を食べる。そして話し合いがはじまる。

校長

皆さん、こういう教訓をご存じですか。ライオンの母親は愛する我が子を谷底へ突き落とす。

桂木

父親ではないんですか。

校長

私はあえて母親と申し上げたい。なぜなら、父なし子の場合はどうするのですか。

夏目

校長先生、母なし子の場合もありますよ。

校長

その時は父親です。物事はもつと柔軟に考えて下さい。つまり、母親あるいは父親のいずれかの保護者ですね。両方いっぺんにつき落とすんじや、目もあてられませんから。一方が突き落とすとして一方が見守るとか。息子をですか、娘をですか。

桂木

校長 娘であれ、息子であれ。
夏目 後ろ足ででしょうか、前足ででしょうか、つき落とすのは。

校長

肉体の一部で、です。

保科

肉体の一部！まあ、どこでもですか？

校長

そうです。つき落とせる力のある所なら、どこでも。

木下

頭とか、シッポですよね。

保科

お尻ですよね。

夏目

後ろ足にきまっています。

校長

じゃあ、それはどこでもいいとしまして、仮に前足の爪の先とします。それに何の因果かつき落としたりしますね。

桂木

どこを？

校長

まあ、この辺です。

保科

大変！

校長

少し話を前に進めたいと思います。

大谷

校長先生がいかにライオンを突き落とすかというお話ですか。

校長

いいえ、私はライオンはつき落としません。誤解があるようなので、初めから申します。ライオンの両親の母親か父親そのどちらかが、自分の娘であれ息子であれ、どちらかをつき落とせる力のある肉体の一部で、子供の肉体なんらかの部分をつき落とす場合、はからずも子供の肉体が谷底へ落ちた。その時の精神は母親の胸に、父親の胸に。その行為は残酷ですが、その子供が谷底から這い上がった暁には、子供にとってどれほど修業になるであ

ろうと。これは

大谷 一つの肉親の愛情の賭けだと思えます。大いなる試練だと思えます。この試練を肉親の愛情だけでなく、友情にも応用できるのじゃないかと思えます。しかし、その子供が谷底から這い上がってこなかった暁にはどうしますか。いつまで待っても子供が姿を現さなかった暁には、それでも肉親の愛情は偉大だというのでしょうか。愛とはそれほどまでに試されなければならぬのでしょうか。

校長 じゃあ、こう訂正します。ライオンの両親の母親か父親そのどちらかが、自分の娘であれ息子であれどちらかを、つき落とせる肉体の一部で、子供の肉体のなんらかの部分で、子供が這い上がれる深さの範囲の谷底につき落とすとしたら死ぬこともなく安全でしょう。

大谷 校長先生、安全だったら試練にはなりません。一メートルぐらいの谷底があればの話ですが。そんな谷底だったら、わざわざつき落とすこともないじゃないですか。また、子供が這い上がれる程度の谷底の深さとは、どの程度の深さとお思いになりますか。人間の主観とは果てしないもの。つき落とす側で十メートルを限界だとしても、つき落とされる側で九・九メートルが限界ならば、十センチの差で命を落とすことになります。また、二十メートルを限界になおかつ、這い上がってくる子供もあるでしょう。

校長

桂木

ハイ、校長先生、いい考えがあります。こういうのはどうでしょう。谷底につき落とす前に、つき落とされるための訓練をしたらどうでしょう。一メー

校長 トルぐらいからはじめて二メートル、三メートルと深くしていけば、やがては十メートルの深さでも、二十メートルの深さでも這い上がれるようになるかもしれません。

校長

それはなかなか名案だと思えます。子供の肉体訓練にもなるし。校長先生は子供の肉体訓練のことをお話ししてらっしゃったんですか。私は

校長

また、子供の精神修行のお話だと思っております。健全な精神は健全な肉体に宿ると申します。すなわち、健全なる親は、子供の健全な精神の育成のために、健全なる肉体の訓練をすることが必要不可欠

でしょう。よろしいかな。健全なるライオンの両親の母親か父親そのどちらかが、自分の健全なる子供の娘であれ息子であれどちらかを、つき落とせる肉体の一部で子供の肉体のなんらかの部分で、子供が這い上がってこられる深さの範囲の谷底につき落とす。

夏目

保科

校長先生、そんなところでいいと思えます。校長先生！万が一、谷底に毒蛇あるいは何らかの害を及ぼす動物がいるバイはどうなるでしょう。

害を及ぼすものについて、口々に言い合う。

校長

その場合は、父母のいずれかが谷底へ前もって降りて安全かどうかを確かめ、そして父母のいずれかがつき落とす。

木下 異議あり。それでは片親だけの子供はどうしますか。かわいいそうです。
校長 片親の場合には、つき落とす前の日に谷底へ降りて囲いを作り、何も無いのを確かめ、次の日に子供と出かけ、つき落とす。

保科 それは少し安全だと思います。

桂木 しかし校長先生、それは雨の日ですか、晴れの日ですか、風の日ですか、はたまた、風の日ですか。

校長 はい、風の強い日だと落ちた時、風の勢いにより囲いからはずれると危ないので、なるべく風のない晴れた日を選んで方がいいと思います。

夏目 校長先生、ではこうですね。カラリと晴れた風のない日に親子連れだつて……。

保科 校長先生、もちろんお弁当を持っていくんでしょう。

校長 そうですね。サンドイッチぐらい持っていた方がいいでしょう。

木下 校長、サンドイッチの嫌いな子供はどうするんですか。かわいいそうです。

校長 その場合は子供の好みを前もって調べておいて、子供の好きな食べ物を持って行って下さい。

おにぎり、日の丸弁当、寿司にうな井、各自好きな食べ物を提案する。

木下 校長先生、ケイレンするといけないので準備運動をさせ、途中で声もあげるので、発声練習もした方がいいと思います。ワーオ、ワーオ。

保科 その時、子供に二回転宙返りぐらいさせた方が素敵だと思います。

校長 そうですね。二回転半ぐらいがいいんじゃないでしょうか。

桂木 見事な着地でケリがつく。これで親子の愛情が試される訳ですね。校長先生、まともをお願い致します。

校長 健全なライオンの両親の母親か父親そのどちらかが、自分の健全なる娘である息子であればどちらかを、つき落とせる力のある肉体の一部で子供の肉体の何らかの部分、這い上がってこられる深さの谷底に、あらかじめ危険物を取り払い、囲いを設け、カラリと晴れた風のない日に子供の大好きなお弁当を持ち、親子仲良く歌など歌い目的の崖っぷちに辿りつき、充分な準備体操と発声練習をして、お前いきますよのかけ声とともに注意深くつき落とす。つき落とされた子供は二回転半宙返りの末、見事な着地を決めた後、這い上がってくる。

木下 校長先生、提案。ひとつ授業の一環として、つき落とされる子供のための訓練課目を設けたらどうでしょう。

保科 そうですね。体操とか、発声とか、お料理とか。

校長 それはいい考えだと思います。名づけてライオン課目といたしましょう。

全員、はればれ顔。

木下 校長先生、今日はまたカラリと晴れた子供のつき落とし日和ですね。こんな日は腕がムズムズしませんか。

保科 ほんとうに。
全員 ほんとうに。
声 キャー。

やがて、遠くの空の彼方からつき落とされた子供の叫び声が聞こえてくる。

満足気にほほえむ母親達。

―海底に眠る教室―

深く静かな海底。誰もいない教室。どこかで見たことのある重装備の者たち。時間のリコマリを並べ変えるように、教室の机を動かしていく。教室に光がただよい昆虫採集の子供達が現れる。長く遠い旅から帰ってきた放浪者のように。ここはなぜだかなつかしい。

―五時間目 国語―

陽のあたる坂道より、国語の教師、保科がやってくる。

遠い、はるかな昔から教室はそこにあり、先生と生徒はこうして出会ったような、時を越えた、ある普遍的な授業風景。

(実際にはセリフを全て排除し、場面そのものがスライドのように点滅

する。セピア色の明りと、B・G・Mだけで進行する。)

(保科) みなさん、おはよう。
(生徒) おはようございます。

(保科) 出席をとります。大谷恵美子さん、桂木秀子さん、木下静江さん、斎藤妙子さん、夏目新子さん。明日から夏休みです。みんな夏休みの計画はもうたてましたか？

(生徒) はい。

(保科) 桂木さん、元気なお返事ですね。どんな計画を立てたのかしら。
(桂木) はい。ほぼ計画表も作りました。パウリの排他原理の発見の歴史を調べて、それをまとめること。そして近頃、地震が多いので、みんなに危険を少しでも早く教えてあげるために地震探知器をつくる。それを、東大地震研究所へ持って行ってみんなに喜ばれるようにしたい。

一人一人、自分の夏休みの計画を話す。

(保科) 夏目さんは、どんな計画を立てたの？

(夏目) はい、今年は昆虫採集です。全国夏休み展に出品しようと思っています。

(保科) そう、それは素敵ね。どんな虫を集めるのかしら？

(夏目) 先生、見て下さい。この図鑑に載ってるこの虫。この虫を採ってみたいんです。

(保科) この虫はなかなか見つからないのよ。とつても珍しい虫ですよ。
(夏目) そうなんです。だから、採ってみたいんです。

皆、図鑑を見に、夏目の机の囲りに集まってくる。

(保科) この虫は、きつとあの森の中にいるかもしれないわね。

(夏目) 森の中……。森？七つ森のことですか？

(保科) そうよ。あの森の中なら見つかるかもしれないわね。

(夏目) でも先生、あの森は。

(保科) そうね。あの森の中に入って行方不明になった生徒がいました。他にも森の中で、道に迷って帰れなくなった人達がたくさんいるという話です。古い村の言い伝えでは、あの森の中に大きな楠があつて、その木のまわりにいろいろなものが集まり、つどうのだそうです。

(斎藤) いろんなものって？

(保科)

生きとし生けるもの全て。道に迷った者も迷わぬ者も、そして、死してなお迷える者達も又……。私も小さかった頃、あの森に行ったことがあります。珍しい虫は見つかりましたが、採ることはできませんでした。あの時の私夏休みの宿題は、そのまま森の中に迷い込んでしまいました。あなたが、森に入った時、ひよつとして、私のなくした宿題に出会うことがあるかもしれないね。

(夏目) 先生、もしみつかったら、私、持ってきてあげる。

(保科) ありがとう。あなた方の探す珍しい虫もみつかるといいわね。
(生徒) はい。

(保科) では、今日は、一学期最後の授業です。教科書を開いて下さい。三六頁の詩、『夏幻想』について感想を書いて下さい。

生徒は、机にむかい、熱心に作文を書きはじめる。

(保科) さあ、大体書けたようですね。では、もう一度この詩を読んでみましょう。では、夏目さん。

(夏目)

宮沢賢治『夏幻想』より

紺青の地平線から、かすかな茶色の煙りがあがる。

(あつあの鳥は何だろう)

(ほおじろだわ、きつと)

(どれだい)

稲草が魔法使いの眼鏡で見たというふうで、天があかるい孔雀石板で張られているこの日なか。

赤ペイントの高圧線にからだをまげてとまっているのは何鳥だろう。

(木下) (ほおじろでない、きつと小さな五位さぎだ。あんなに口ばしが長いんだもの)
(だつてせなかが青いわよ)

(空がうつってるんだい)

(ははあ、あいつはかわせみだ。かわせみさ目だまの赤い)

(あつ飛んだ飛んだ)

(やっぱり蟬のようだわね)

(大谷) さてこんどは、ししうどの月光いろの織形花から、はがねの翅の甲虫が一ペ
ンに千、飛びあがる

(ねえ、あれ月見草だねえ)

ええ麦の白い銀の上を、二足のへらさが渡って行く

(まあ、あたし、月見草の花粉でいっぱいだわ)

(保科)

アイリスの火はしずかに燃える

はい。よく読めました。二学期からは新しい教科書が待っています。新しい漢字や新しい言葉もたくさんでてくるでしょう。皆さんは、これからも、たくさんの新しいものと出会ってゆくのです。楽しみです。では皆さんお待ちかねの通信簿を渡します。名前を呼ばれた人からとりにきて下さい。

一人一人、通信簿を渡される。

悲喜こもごもに、大騒ぎをする子供達。

保科

一学期は、皆さん、よく頑張りました。夏休みは思いっきり楽しんで下さいね。そして素敵な夏休みの思い出がたくさんできるといいですね。又、元気な皆さんに会えるのを楽しみにしています。では、夏休みが終わったら、又、

会いましょう。

斎藤

起立っ。

生徒

先生、ごきげんよう。

保科

ごきげんよう。

声(生徒)

あつ先生、空があんなに。

声(生徒)

明日は、きっと晴れですね。

声(先生)

ほんとうに。

声(全員)

ほんとうに。

声

キャー。

別れの曲「又、会いましょう」が流れてくる。

誰もいない夏休みの教室が西日をうけて静かに浮かびあがる。

又、会いましょう、いつかどこかである晴れた日に。

時はめぐり、繰り返すこの空の下で。

私がなくしたあの日たち。

たくさんの私達。

又、会いましょう。

ある晴れた日に。

完

作・市堂令

(天光 眞弓)
(葛西 佐紀)
(芹川 藍)
(天衣 織女)
(伊沢 磨紀)